研究課題　中世大和国宇智郡関連史料の研究資源化―栄山寺を中心に―

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　下村周太郎（早稲田大学）

　所内共同研究者　菊地大樹・尾上陽介・木下竜馬

　所外共同研究者　高木徳郎（早稲田大学）・佐藤亜聖（滋賀県立大学）・山崎竜洋（五條市教育委員会文化財課文化財保存係）

研究の概要

（１）課題の概要

　大和国宇智郡（現・奈良県五條市）は、大和国の南半分を占める吉野郡と河内国および紀伊国と境を接する「国境地帯」であり、大和街道（古代下ツ道）と吉野川とが交わる交通の要衝ともなっている。平安期は興福寺の影響下にあったが、中世になると高野山（真言宗）や葛城山（修験道）など多様な宗教的要素が入り込んでくる。また、南北朝期には南朝の、室町期には河内守護畠山氏（いわゆる分郡守護）の支配を受け、戦国期には国人や地侍による「惣郡」の一揆が結ばれたことでも知られている。  
　上記のように宗教的・社会的にも政治的・軍事的にも特色あるフィールドとなっている中世宇智郡関係史料の研究資源化のため、特に栄山寺を調査対象とする。藤原武智麻呂の創建と伝えられる栄山寺は、奈良時代に遡る全国的にも屈指の古刹であり、古代以来の古文書や金石文を伝えている。しかし、現在は文書の所蔵先が分散していることもあって、史料群の全体像を完全に把握するには至っていない。こうしたことから、栄山寺の金石文や古文書諸写本、栄山寺文書以外の同寺関連史料などの調査を軸に、宇智郡関連史料の研究資源化に取り組む。

（２）研究の成果

　栄山寺の中世石造物は戦前から存在が知られており、史料編纂所には紀年銘のある一石五輪塔の拓本が架蔵されている。戦後にも『五條市史』において調査報告がなされており、その内容はおおむね一致するが、後者には一部新出史料も含まれていた。その後は調査が実施されておらず、無紀年銘五輪塔を含む五輪塔群の全貌や現状について悉皆的な調査が望まれていた。  
　昨年度に引き続く今年度の調査により、一石五輪塔群の現状を全面的に把握することができた。戦前以来、逸失したものはわずかであり、同五輪塔群全体の保存状態が比較的良好であることが確認された。また、過去になされた調査はおもに紀年銘が完全に残っているものを対象としていることが分かったが、今回の調査を通じて、干支のみあるいは人名のみの銘文をあらたに多数見出すことができ、これらについても網羅的に拓本の採取を実施した。  
　今年度は、一石五輪塔に加えて、重要文化財に指定されている弘安七年銘の石灯籠や、従来未調査であった永禄八年銘の石造地蔵菩薩像についても調査を行うことができた。石灯籠の銘文については、火袋の左右にある種子（梵字）も拓本を採取することができ、これが「ウン・バイ（愛染カ・薬師）」であることを確認できた。現在の栄山寺の本堂と本尊は、室町期に建立・造立された薬師堂と薬師如来であるが、かかる信仰が鎌倉時代にさかのぼる可能性が想定できる。文書史料が極めて乏しい鎌倉時代の栄山寺を考える上で貴重な史料と言える。また、石造地蔵菩薩像については、新出の史料であり注目される。複数の僧侶の名が刻まれているが、このうち「英秀」なる人物は、永禄四年の文書史料に「一﨟」としてその名が見える。  
　今回の共同研究によって栄山寺の石造物を悉皆的に調査することができ、銘文の分析から地蔵菩薩像や一石五輪塔が寺内の上層の僧侶によって造立されていたことを明らかにできた。栄山寺の寺内組織や信仰のあり方などを考える貴重な素材を得られたと言えよう。